



250号
2020/1

日中文化交流市民サークル'わんりい'
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1

2020年

明けましておめでとうございます



朝日を浴びて：台湾人にとって最高峰玉山(3952m)登頂は体力があっても難しい。入山者数を、山小屋の定員1日92人に制限。ただし外人枠24人が優先なので、入山許可証入手は希望者の1割だという。許可証をとっても入山日は決まっているので、雨天も有りうる。従って玉山で日の出を迎えるのは喜びもひとしおだ。

(玉山山頂にて 2018年11月 登山ガイド・写真家＝蘇慶元撮影)

'わんりい' 2020年1月号の目次は20ページにあります

今月の言葉、日本ではこのままで使うことは余りありませんね。同じ意味の、「一飯之報（一飯の報い）」とか「一飯之恩」が多く使われています。

・>・>・>・>・>・

漢王朝が成立した時に功労のあった將軍韓信は、小さい時、家が貧しくて食べるものが無い時、お腹を空かせて、仕方なく魚釣りに行くのでした。

韓信が魚を釣りに行く川辺に一人のおばあさんがいました。おばあさんは韓信がお腹を空かせているのを見て、可愛そうに思い、自分の食事を分けてあげました。韓信はとても有難く思い、おばあさんに言いました。

「おばあさん、ご親切ありがとうございます。このご恩はいつかきつとおかえししますから」

と言うと、おばあさんはひどく怒って言いました。

「わたしは、あんたに恩を返してほしくてご飯を分けてあげたんじゃないよ！」

漢王朝が成立して、韓信は齊王に封じられました。彼は従者に命じて、沢山の美味しい食べ物を、あのおばあさんに届けさせ、そればかりでなく黄金千金を贈りました。

これが、「一飯千金」と言い伝えられたお話です。

・>・>・>・>・>・

言葉の意味：他人から恩恵を受けたら、決して忘れずに、自分の能力が上がった時は必ず恩恵を受けた人にしっかりと恩返しをすべきである、という意味。

使い方：よその人から恩義をうでたら、必ずお返しをしなければいけない、韓信の「一飯千金」のお話のように。

・>・>・>・>・>・

前月のこのコラムで、越王勾踐のお話をした時、勾踐の名補佐役との誉れが高い宰相・范蠡の言葉を、漢の將軍・韓信が引用したことを付記しましたが、今月は偶然、その韓信のお話です。

韓信は漢王朝成立の時期に、劉邦を助けて大活躍した優れた武将で、「**國士無双**（天下に二人とない勇者）」と言われた人です。若い時は、このお話にあるように、食べるものもなくして苦労した

ようです。それでも「世に出る」という野心は早くから持っていて、遊び仲間から持っている劍のことでからかわれ、「**勇氣**があるなら、その劍でおれを切ってみろ。臆病でそれが出来ないなら俺の股を潜れ」と言われました。

韓信は、「ここで彼を斬ったところで何の足しにもならない。却って仇と狙われるのがおちだ」と考え、股を潜りました。

これが有名な「韓信の股潜り」というお話ですね。

初め韓信は項羽に仕えましたが、厚遇を得られず、劉邦の陣へ鞍替えしました。そこでも初めは認められませんでした。推薦する人がいて活躍の場を与えられ、漢王朝成立のために大いに働きました。

項羽が亡くなり、楚王に子が無かったので、劉邦は韓信を楚王に封じました。楚は韓信の生まれ故郷なので、臣下に命じて、あのご飯を食べさせてくれた老婆を探させ、沢山の食糧を届けさせ、千金を与えて昔の恩義に報いました。それで人々は「一飯千金」と言うようになりました。

この後韓信は、昔股を潜らされた元の仲間を探し出し、「あの時忍耐することを教えられ、後々大變役に立った。礼を言いたい」と言い、彼にそれなりの役職を与えました。



挿絵 満柏氏

先月号は、遼陽に関わりのある人物でしたが今回は遼陽出身の人物です。まず「公孫度」から紹介します。名字は「公孫」のいわゆる漢字二文字の複姓です。中国では名前は一字が極めて多いですが、司馬、諸葛、歐陽のように二文字の姓も見受けられます。子供に漢字を教える教材の一つに「三字経」^{注1)}と共に「百家姓」があります。これには448の単姓と60の複姓の計508の名字(姓)を載せています。やはり複姓は少ないですね。名字の総数は日本が圧倒的に多いですが、それでも中国のそれは数千もあるようです。「公孫」とは、公(こう)の孫と言う意味なので、春秋戦国時代の諸侯の孫は公孫であり特定の地域にある名前ではないそうです。因みに公孫の氏の中では、戦国時代に秦の国政改革を断行し後の秦の天下統一の礎を築いた「公孫鞅(商鞅)」が有名です。

さて公孫家は遼東半島では、190年頃から238年のわずか50年くらいでしたが、三代(度→康→淵)に亘って遼東半島全体を支配したのです。ちょうど220年に後漢が滅亡し三国時代に突入したころでした。(ある本には、魏、蜀、呉に公孫を加えて四国時代とも言えるを書いてあります)初代の公孫度は、資料には幽州遼東郡襄平県の人と出ています。幽州は今の河北省から遼寧省にかけて存在した地域です。三国志演義で有名な「董卓(?~192年)」が中央で実権を握ったとき、友人の徐栄^{注2)}の推挙もあり、遼東太守に任じられました。太守とは郡の長官で、権力の座に就いたわけです。彼が先ず何を行ったかと言うと、地元には彼の出自を軽んじる名族が多くいたため、これらの家に罪を着せ百余家を滅ぼします。遼陽は後漢の都の洛陽から遠く離れたところであったため、後漢が

衰退し董卓も部下の「呂布(?~198年)」に殺害された後、遼東地域は公孫氏による独立国の様相を呈してきました。そして黄巾の乱^{注3)}以来の混乱に乗じて遼東半島に50年に亘る半独立政権を樹立した訳です。公孫家を書くとき、私は奥州・藤原氏を思い浮かべます。藤原氏4代(清衡、基衡、秀衡、泰衡)は、1087年から1189年の約100年余り奥州・平泉を中心に半ば独立国として東北地方一帯に勢力を広げました。ところが都落ちしてきた源義経を匿ったことでついに源頼朝に滅ぼされたわけですね。4代目の泰衡は和睦を期待して義経の首をとり頼朝に差し出しましたが、関東の背後に独立政権があることを危惧した頼朝は出兵し泰衡を殺したのです。これにより奥州・藤原家はあっけなくほろんだのです。



公孫度
中国国家人文地理「遼陽」から

公孫度に話を戻しますと、彼はさらに高句麗や烏桓(今の内モンゴル

自治区に存在した遊牧民族)を討伐し功績をあげ、董卓死後に実権を握った「曹操」に賞され武威將軍、永寧郷侯の地位を与えられています。これについて遼東の王と自負していた彼は曹操から見下された思いを持ち、不満であったと伝えられています。その後、曹家の魏から実権は司馬家(晋朝)に移り、状況は大きく変化し、ついに238年3万の精兵を引き連れた「司馬懿(仲達)」により公孫家は滅亡させられました。やはり司馬懿には遠く離れていても無視できないほどの存在だったのでしょうか。司馬懿にうまく取り入って折角3代続いた公孫家を存続できなかったのでしょうか?交通機関が馬しかない時代、都から遠く離れたところでは、同じような独立政権ができるということでしょうか。

次に紹介するのは、「王爾烈(1728年~1801年)」という人物です。彼も遼陽の人です。幼いこ

ろから勉学に励みます。東北地方には以前書いたように三大名山がありますが、そのうちの千山の中腹にある「龍泉寺」に籠って勉強したそうです。大きくなって当然のように科挙の試験に取り組み、「殿試」という最終の皇帝の前での試験でも一番の成績でした。また書の腕前も超一流で、王羲之の気品を備えた書を継承する人、と称えられたのです。中央官庁の翰林院という、唐代以降朝廷で文書の起草を行う役所に入りました。「翰」という字は、羽とか筆の意味に使われます。昔は羽毛で筆を作りましたが、転じて文章を司る役人の意味ともなりました。この役所はエリート中のエリートの集団でした。彼はまた「三江才子」とも褒め称えられました。三江とは、「江蘇省」「浙江省」「江西省」の江の字がある省のことで、当時はこの三省が最も文化学術水準の高い地区といわれ、全国から有能な人が集まったそうです。その中での白眉だったとか。人格も優れ清廉潔白で、正義感が強く、かつ誠実な人柄は人々に親しまれていたそうです。これ以上の褒め言葉がないくらいの聖人君子の域に達した人物であったようです。彼の功績を讃え、高潔な人物像を紹介するため、遼陽市内の白塔公園から近い場所に「王爾烈紀念館」が建てられています。

彼は、「四庫全書」の編纂で名を残しました。四庫全書とは、清の乾隆帝の勅命により 1741 年から編纂された中国最大の漢籍叢書で、何と 36000 冊、230 万ページ、10 億文字という膨大なものです。編集に参加して名前が登録されている文人学者は 400 人を超えるとか。彼はその中の一人ですが中心になって作業を進めて行きました。四分類〈経・史・子・集〉されているので四庫全書という名が付きしました。中国国内の文献に留まらず、日本、朝鮮、ベトナムの漢籍にまで及んでいます。この叢書の印刷には中国の四大発明の一つである「印刷」技術を駆使したのかと思われるかもしれませんが、実は全て筆書なのです。したがって完成は 41 年後の 1782 年まで掛かっていますが、気の遠くなるような作業ではありませんか！ 四庫全書の正本は 7 部作られました。それを北京の紫禁

城など全国 7 か所に収蔵されたのです。しかし 7 部の内 3 部は、太平天国の乱や義和団の乱で焼失してしまいました。誠に残念なことです。中国は度重なる戦乱や文化大革命によって世界遺産級の書物や遺跡が多数失われていますが、中国だけでなく世界にとっても損失と言うほかありません。

本号でもう一人変わり種をご紹介します。中国人ではなく、現在ニューヨーク在住の日本人の「秋吉（稚吉）敏子」さんです。知る人ぞ知る世界的なジャズピアニストであり、作曲家、編曲家、ビッグバンドリーダー（現在バンドは解散）です。両親とも日本人で、彼女は 1929 年 12 月 12 日に遼陽で生まれました。従って現在 90 歳となります。

小学校 1 年生の時、3 年生の弾く「トルコ行進曲」に魅入られてピアノを習い始めるのです。後に女学校に上がる時、ピアノを良い教師に習うため大連に移ります。大連音楽学校で中国人の楊考毅にピアノを習いますが、敗戦になったので高校生の時大分に引き上げました。別府の進駐軍のキャンプなどでのジャズピアニストで名前を次第に挙げて行きます。1949 年、20 歳の時上京して、当時の日本のトップグループでピアノ演奏を始めます。1951 年には、あの渡辺貞夫を加えコーギーカルテットを結成。1956 年、26 歳の時単身渡米して、バークレー音楽院で学びます。その後アメリカ各地で演奏し、数々の賞を受賞し、1999 年には日本人で初めて「ジャズの殿堂」入りも果たしました。日本にも何度も里帰りし、多くの演奏会で美しい旋律を披露しています。とにかく素晴らしい人物ですね。（続く）

■注

- 1) 三字経：伝統的な中国の初学者用の学習書。3 文字で 1 句として偶数句末で韻を踏んで覚えやすくしている。南宋の「王応麟」の作と伝えられるが明確ではない。
- 2) 徐栄：（生年不詳～192 年）後漢末期の武将。幽州玄菟郡（今の北朝鮮あたり）出身。友人の公孫度を遼東太守に推挙した。
- 3) 黄巾の乱：後漢末期の 184 年に、道教の一派である太平道の教祖「張角」を指導者とする信者が各地で起こした農民の反乱。目印に黄色い頭巾を頭に巻いたことからこの名称がついた。

李白の「峨眉山月の歌」と岑参の「行軍九日長安の故園を思う」

報告：花岡風子

今回のお題は李白の『峨眉山月の歌』です。李白はこれまでもう何度も取り上げられていますが、改めて生い立ちを振り返りますと、旧説では、701年に四川省で生まれたということになっていました。母が太白星を踏んだ夢を見たあと身籠ったとのことで、字を太白あざな たいはくといいます。太白とは金星のことです。金星とは夜空に輝く一つ星。まるで李白の生涯そのものを表しているかのようです。若い頃から任侠に憧れて剣術に励んだり、仙人を志して道教を学んだり、自由奔放な暮らしをしていました。

但しその生い立ちについては、不明な点が多いようです。一説によると、父親は西域地方を往来する商人で、李白の生地は西域の碎葉スイアブ（今のキルギス共和国辺り）であったそうで、最近ではこれが通説となっています。だとすれば、あるいは李白には異民族の血が流れていたのかもしれませんが。「李白はどこか中国人離れしたところがありますね。常に夢とロマンを追い求め、堅苦しい礼節を嫌い、皇帝の面前も憚らず酒を喰らって傍若無人のふるまいをするなど、普通の中国人にはあり得ませんね」と植田先生。確かに、李白は玄宗皇帝の前でベロンベロンに酔っ払って詩を書くこともあったようで、映画の一シーンにもなっています。しかし、李白のそんな天衣無縫さを玄宗皇帝は愛します。先祖が北方民族の血を引くとされる玄宗皇帝も、或いは同じような性格の持ち主だったのでしょうか。自分の中にある夢とロマンを李白の生きざまに重ねていたのかもしれないですね。玄宗皇帝がもし皇帝でなければ、人間味豊かな芸術家になっていたかも？ ところが幸か不幸か、玄宗は皇帝でした。そしてこの二人の関係が一年余りで終わりを告げたのは、歴史の示す通りです。

さて、この詩でも月が取り上げられていますが、李白はとても月が好きで、月を読み込んだ作品が数多くあります。「池に映った月を取ろうとして、池の中に落ちて死んだとも伝えられています。まあ、そ

れはないでしょうけれど、それがまことしやかに語り継がれているのも李白の魅力を物語っていますね」と植田先生。

é méi shān yuè gē
峨眉山月歌

é méi shān yuè bàn lún qiū
峨眉山月半輪秋
yǐng rù píng qiāng jiāng shuǐ liú
影入平羌江水流
yè fā qīng xī xiàng sān xiá
夜發清溪向三峽
sī jūn bù jiàn xià yú zhōu
思君不見下渝州

峨眉山月の歌

é méi shān yuè bàn lún qiū
峨眉山月半輪はんりん あきの秋

yǐng rù píng qiāng jiāng shuǐ liú
影は平羌江の水に入りて流るなが

yè fā qīng xī xiàng sān xiá
夜清溪を發して三峽に向かうせいけい さんきょう

sī jūn bù jiàn xià yú zhōu
君を思えど見えず渝州ゆしゅう くだに下る

これは李白が25歳にして初めて故郷を離れ、中央に出るときの詩です。「峨眉山」「平羌江」「清溪」「三峽」「渝州」と四川地方の地名が並んでいますが、「ここには、慣れ親しんだ故郷を後にする若者の未練心と未来への期待感が、複雑に入り混じって行間に見え隠れしているようですね」と植田先生。なるほど、観光案内ではないんですね。

一句目は秋の峨眉山に半月が掛かっているとのことですが、李白がこの詩を詠んだ頃と当時の暦を調べ上げると、満月だったそうで、なぜ満月なのに敢えて「半輪」としたのかと疑問を呈する人が今もいるそうです。植田先生曰く「マニアックというか…でもそれだけ李白の詩には、人の心をひきつけて離さないものがあるということでしょうか」。マニアックな人というのはいつの時代にもいますが、好きなものに対する飽くことを知らない執着と情熱に

は驚かされますね。李白が満月を見ていたはずなのに、敢えて詩に「半輪」と書いたのは何故なのかを追及するなんて、普通の人間には出来ないことですよ。(笑)。

「詩仙」と称され、その作品は神品と評価されるほど李白は超越した魅力を保ちつつ、こうして今なお後人たちに愛され続けているわけです。

大酒飲みで女好き。ちょっとアウトロー的なところもある李白は、飄逸自在に複雑な時代を生き抜きました。これまで鑑賞してきたどの作品にも、他の詩人には見られない独特の魅力が感じられます。その着想と表現技術は、さながら李白マジックとでも言えるかもしれませんね。

この作品も、峨眉山下で秋の夜空に浮かぶ上弦の月を見上げていたかと思うと、二句目は一転して平羌江（今の青衣江）の川面に視点を変え、流水と共に流れる月影を見下ろすシーンに移ります。そして三句目には夜更けに清溪の港を発ち、三峡に向かう作者の旅姿が映し出されます。ここでいう三峡とは、今は三峡ダムとなって姿を消したかつての名勝地が思い起こされますが、一説には、青衣江下流にも小三峡と呼ばれる場所があるそうで、ここではそれを指すとも言われています。

そして、最後の一句に「君を思えど見えず、渝州（今の重慶市）に下る」とありますが、いよいよ故郷を離れる時に思う「君」とは一体誰のことなんでしょうね。諸説ありますが、かねてより見慣れた峨眉山の月そのものを擬人化したとも、親しかった友人を指すとも言われています。また、故郷に残した恋人であるという説もあります。だとすれば「一輪」（満月）でなく「半輪」（半月）という一語が妙に切実感をもって迫ってきますね。この最後の一句も様々な妄想？をかきたててやみません。

植田先生から作者と作品についてのお話を十分に伺ってから、一同ひたすら音読の世界に浸りました。この詩は規則通りに作られていて、大変読みやすく、一句目、二句目、四句目のそれぞれ最後の字で韻を踏んでいます。秋 qiū 流 liú、州 zhōu と中国語の

音で押韻の美しさを堪能でき、詩の背景をとくと心に刻みながら声に出せるのも、このクラスの醍醐味なのです。

二首目は岑参（715年～770年）の「行軍九日長安の故園を思う」という五言絶句でした。岑参は、杜甫より3歳、李白とは14歳年下です。どちらとも親交があり、杜甫とは特に親交が深かったようです。744年に科挙に合格して進士となります。その後、節度使（軍事を司る地方長官）の幕僚となり、長く西域での従軍生活を経験し、その関係から「辺塞詩」を得意としていました。

辺塞詩とは戦勝の喜びや戦場の悲惨さ、兵士たちの望郷の念等を詠った、いわば流行歌のようなもので、必ずしも現地体験に基づいて作られたものではありません。また、この時代に流行したものとしては、他に「閨怨詩」というのもありました。寵愛を失った女性の恨みを綴ったものです。中には夫や恋人を戦地に取られた女性が、ひとり寝の寂しさを怨んだ詩などもありました。多くは不遇をかこつ男性たちが、世の不合理的を訴えるために、その心情を兵士や女性の嘆きに託して綴ったものです。「まあ、いわばカラオケで演歌を歌って憂さを晴らすようなのですかね」と植田先生。しかしその中から、古典として歌い継がれる名作も数多く生まれたのです。

一方、中には実際の従軍体験に基づいて作られたものもあります。岑参の辺塞詩はその一例です。岑参は実際に参謀として辺境の地に赴いた経験を持っているので、「彼の作品は現地に行かなければ書けないようなものになっています」と植田先生。

xíng jūn jiǔ rì sī cháng ān gù yuán
行 军 九 日 思 长 安 故 园

cén shēn
岑 参

qiǎng yù dēng gāo qù
强 欲 登 高 去
wú rén sòng jiǔ lái
无 人 送 酒 来
yáo lián gù yuán jú
遥 怜 故 园 菊
yīng bǎng zhàn chǎng kāi
应 榜 战 场 开

行軍九日長安の故園を思う

強^しいて 高^ゆきに登り去かんと欲するも

人の酒を送る無し

遙かに憐れむ故園の菊

応^{まさ}に戦場^そに傍^そいて開くべし

この詩を書いたのは至徳二年（757）。当時、岑参は安祿山軍によって占拠されていた長安を奪回する戦いに従軍していました。九日とは九月九日の重陽の節句のことで、その日に長安の故郷を偲んで書いたものだそうです。このとき岑参は、命がけで長安を脱出して肅宗のもとに駆けつけた杜甫と共に、鳳翔^{ほうしょう}の行在所に居たのです。旧暦の九月九日は、現代の暦の10月中旬に当たりますが、この日は菊花節ともいわれ、高いところに登って、酒に菊を浮かべて飲み、遠く離れたところにいる親族を偲ぶ習慣があったのだそうです。

一句目では、従軍中ではあるけれど、強いて高いところに登って菊酒を飲んで、故郷や家族に想いを馳せようとしたことを述べ、二句目で「しかし誰も酒を送ってこない」と続きます。「人の酒を送る無し」の一句は、その昔、重陽の節句に同じく酒がないと嘆いていた陶淵明に酒が送られてきたという故事（『南史』隠逸伝）に基づいています。あの時の陶淵明には酒が送られてきたというが、こんな僻地には誰も酒など送ってこない。この一、二句に、従軍生活の苦しさとともに、当面する時代の厳しさが、それとなく表現されています。

三句目では視点がガラリと変わります。三句目の「遙かに憐れむ故園の菊」とは、はるか遠く都長安で寂しく咲いているであろう可憐な菊をいつくしむ様です。この一句には、望郷の念と共に、無残にも踏みじられた都の人々の生活を想う心がにじみ出ています。

菊と言えば秋を象徴する花で、菊には邪気を払う力があるとされ、重陽の節句には、邪気払いの菊酒

を飲むのだそうです。そういえば、私の子供の頃、お正月に大人たちが嗜んでいた花札の絵柄に菊とお酒があったのを思い出しました。

花札の菊と酒が中国から来たかどうかは分かりませんが、この菊酒を飲む習慣は日本にも確かに伝わっていたようです。でも今では一部の地域を除いてほとんど廃れていますね。とはいえ食用菊はごく一般に販売されていますし、アラフォー女子はこれを聞いて、今度こそ菊をお酒に浮かべて飲んでみたいとひそかに思いました次第（笑）。

さて、最後の句、「応に戦場に傍いて開くべし」とありますが、この文の主語は菊の花です。「応」とは、きっと～だろう、～のはずだという意味で、「傍」は、ここでは近くに寄り添うという意味の動詞です。戦地と化した都長安の道端に寄り添うように、ひっそりと咲く菊の花を思い浮かべているのです。

ところで一般の「辺塞詩」とこの詩の異なる所は、都に居て戦場を想うのではなく、辺境の地に在って、戦場と化した都を想うという点です。「もしこれをも辺塞詩とみなすならば、実体験者でないと書けない辺塞詩ですね」と植田先生。

この前年、杜甫はあの有名な『春望』を詠み、華やかかなりし長安の都の荒れ果てたさまを目の当たりにして嘆きますが、こういう詩を読みますと、今の時代がいかにか幸せかと思わずにられません。

岑参はまた、南宋の大詩人陸游に熱愛されたようですが、どちらも気骨のある軍人である一方、戦地でのやるせない気持ちもこうして詩に残されているからこそ、時代を越えて共感したのでしょうか。歴史の教科書のように、過去の出来事をただ年代順に羅列するだけでなく、漢詩は、当時の生身の詩人たちがその生涯を通して体験し、その目を通して観た生々しい時代の記録でもあります。

今の時代では想像もつかない苦難の時代があったことを後世に伝える、素晴らしい手段の一つだと思えてなりません。

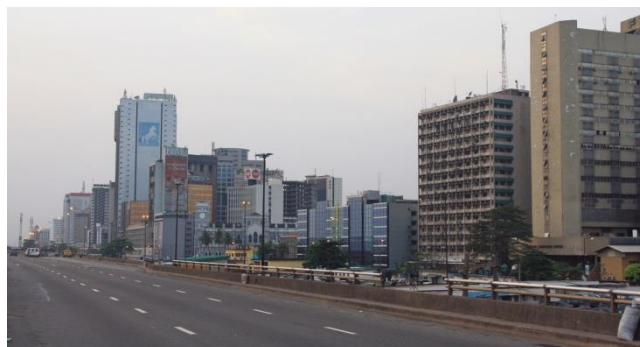
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑨）

高島敬明

前回は、S 班長が「踵骨骨折」という大けがをして病院に担ぎ込んだものの、一晚病室で過ごしましたが医者と相談することなく私の経験から兎に角日本に早く帰国させるしかないと判断し、朝迎えに来たエマニエル君の車に乗せてキャンプに戻ったところまででした。

キャンプの H さんから S マネに事故の概要を報告してもらいました。足のカカトの踵骨骨折で全治 1 か月であり、歩行は出来ないこと等を報告してもらいました。S マネは「S 班長はこの 1 年近くよくやってくれた。1 か月くらい何もしないで体を治してから帰国してください」との話でした。そんな安易な考えなんだと私は不安になり、私から、①踵骨骨折は完治するまで時間がかかること、②歩けるようになってもいびつに骨がくつき易いため、満足に歩けなくなること、③こちらの十分でない医療で満足に歩けなくなった場合、当社の組合の絡んだ責任問題になること、等を繰り返して説明しました。やっと S マネージャーは理解をしてくれたようで「社員が何人か帰るときに付き添って帰すようにします」とのことでした。彼の帰国には皆で空港まで送りましたが班長は悪い悪いと呻くように言いながら空港の中に消えて行きました。結局彼は、半年間日本で治療を受けましたが、まともに歩くようにはなりませんでしたが、組合問題にはなりませんでしたが、歩くとき踵を地面に着くたびに痛みを感じるのだそうで、一生体を横に振りながら歩行をするのです。つらい人生になってしまいました。

1979 年に始まった「第 2 次オイルショック」が 1980 年（昭和 55 年）に入ってアフリカの産油



ラゴスの街並み（2015 年）ウィキペディアから

国ナイジェリアにも押し寄せて来ました。まず最初にジーゼル（軽油）が品薄になって来ました。ガソリンもそうですがジーゼルは我々活動の拠点であるキャンプの全ての生活を支えているのです。250 馬力のジーゼルエンジン 2 台が交互に昼夜を問わず働き続けていて、これが止まると完全に我々の生活は出来なくなって来るのです。まずコンテナハウスに設置された冷房設備、我々の毎日の食事を支えている大きな冷凍庫、セキュリティ設備、上水道の水処理設備、下水道の処理などすべての生活に関係した電気の供給が止まるわけです。冷凍庫には 3 か月分の食材が眠っていますが、当然ダメになるでしょうし、冷房設備でも 2～3 日は辛抱できますが毎日となれば話は違ってきます。兎に角ジーゼル油を確保するしかないのです。

我々は毎日、毎日大使館に通って情報を収集しジーゼルの入手に努めて行かなくてはならなくなりました。あてもなく石油スタンドを回ったり、日本の商社や各企業をわけもなく歩くわけですが事情はどこも同じです。そうこうするうちに今度はプロパンガスが無くなって来ました。これも大変な問題です。魚国のコック T さんはプロパンガ

スで毎日料理を作っているのです。これも毎日商社を頼って紹介を受けて工場やトラックターミナルのような所をまわり、少ない量でも買って帰りました。ターミナルではシュシュとボンベにガスを詰めて行きます。詰め終わるとエマニエルとともに奪い合うようにボンベを確保します。

その詰め込み場所の吹きさらしの休憩所では、作業員が鼻歌を歌いながら煙草を吸って談笑しているのです。危険物を扱っているのにこれでは命がいくつあっても足りません。毎日本業そっこのけでジーゼルとプロパン確保のために奮闘しました。企業がこんなわけですから一般の家庭はもっと大変のようでした。S マネージャーの家も大変のようでした。

燃料確保が厳しくなるにつれて、我々に「麻雀を覚えてもらうんだ」と奥さんと中学生くらいの娘さん2人がキャンプに来るようになりました。麻雀と言っていますが魚国のコック T さんの作る夕食が目的なのです。それに子供さんはいいのですが、奥さんの派手で刺激的な服装はキャンプの男たちには目の毒です。彼らは日本にいる家族から半年も一年も離れて暮らす者ばかりです。こんな男たちの前に出る服装ではありません。H マネも私もほとんど困り果てて、どうしたものかと思案の真っ最中に事件は起こりました。魚国の T さんが「私はキャンプの皆さんの食事を作るためにアフリカまで来たのです。マネージャーの家族の為のコックではありません」と筋の通った文句を言いました。最初のうちはよかったのですが、とうとう夕食時になってもコンテナハウスから出てこなくなりました。H マネは、「高島さん、あなたが一番付き合いがあるのだから行って話してください」と言うのです。隣では奥さんが麻雀をしているので仕方なく裏から回ってノックしますが返事がありません。作業員の食事もあるし困り果てました。冷凍庫や冷蔵庫にはインスタントラー

メンがたくさんあるのは知っていました。今日は皆にラーメンで我慢してもらおうと冷蔵庫に入ろうとした時、H マネが飛んできました。「それはまずいよ。ここはコックさんの領域だから我々が入るとなお話がこじれてしまうよ」とのことでした。奥さんには「コックが体調不良で・・・」と説明し何とか引き上げてもらいました。すると笑顔で T さんが出て参りました。遅い夕食に T さんは小エビのいっぱい入った特上のチャーハンを作ってくれました。流石に H キャンプマネも決心して S マネに事情を話しました。短パンの刺激的な姿が見られなくなるのは残念でしたがこれで一件落着です。

ジーゼルの問題があってから協力会社の運送屋にもよく行くようになりました。そこに雇われのドイツ人メカニシャン(機械技師)がいてすぐに仲良くなりました。もっとも言葉は通じないのですがジーゼルについても彼からよく片言の英語でアドバイスをいただきました。人の良い彼はいつもニコニコ顔で話しかけます。「タカチマ、お前は何故アフリカで結婚しないのか?」「いや日本には妻子が待っているんだ」と言ってもしつこく食い下がります。挙句には「タカチマ、固形のカレーのルーを分けてくれないか」ときます。「カレーのスープは最高なんだ」「OK。コックに相談するよ」と話して別れました。彼にはあれこれ世話になっていることもあり、T さんにお問い合わせすると、「又ですか」とのことです。私以外にも誰かに話しているようでした。T さんは、仕方がないかとカレールー3個を冷蔵庫から持ってきてくれたので、それを持って運送屋の構内の住宅まで届けに行きました。中から彼がニコニコしながら出て来ました。さらに後ろから例のミミズのように髪を編んだ頭の子供たちが3人出て来ました。明らかに彼の子供です。結婚を勧めるはずです。ドイツ人、いや白人は生命力が旺盛と思いました。(つづく)

1970年4月に日本航空に入社しました。すぐに仙台空港にある日本航空基礎訓練所で会社方式の訓練が始まりました。飛行機は航空大学と同じビーチ機ですが装備が違いました。航空大学のビーチ機には無かった“エアコン”が付き快適になり、加えて機内がかなり静かになりました。

訓練機の教官は皆 DC-8 型機の副操縦士経験者で、2年間だけ教官として仙台訓練所に配属された人達ばかりでした。誰も若くスマートで私達と年齢差も少なく親しみやすかったです。

他にも大きく変わったのは訓練生寮の食事が格段に美味しくなったことです。しかし寮には厳しい舎監がおり、門限は夜10時、寮内でのお酒は禁止でした。

入社後ひと月するとサンフランシスコの対岸にあるオークランド空港で約1か月間アメリカ人の教官の下で訓練飛行を経験しました。主に夜間飛行のフライトタイムを増やすためと、アメリカでの生活を経験させることが目的だと思われます。初めてパスポートを取り、現地では会社が借り上げたアパートで同期と自炊生活をしました。

アメリカでの生活は全てが珍しく、スーパーマーケットの巨大さ、ビール、ウイスキーの種類の多さ、冷凍ピザ、アイスクリーム、肉や野菜の豊富なこと、何でもびっくりの連続です。まだ英語は不自由でしたがアメリカ人の教官の下でかなり自由に訓練ができました。夜間飛行で田舎の空港に降りると、夕方から平屋建ての空港のレストランで食事を楽しんでいる現地の人をよく見ました。当時の日本人の生活と比べて何となく羨ましく感じました。

訓練も予定通り終わり、1ドルが360円の時代でしたが、帰りには生地の厚いタオル、香りのよい石けんなどを沢山買ってきました。今では考えられないお土産です。



副操縦士として勤務中 コックピットで

帰国してからも仙台でビーチ機の基礎訓練は続き、1970年の12月やっと基礎訓練過程を終えました。翌年1月からは DC-8 型機の座学が羽田の訓練所で始まりました。機体、エンジン、油圧など飛行機の構造と、操縦手順を学んでから DC-8 型機のシミュレーターでフライトの訓練に入りました。

飛行訓練ではその8,9割がエンジン火災や油圧故障、与圧故障などの故障時操作や緊急操作手順の習得です。

シミュレーターの訓練と審査が無事に終わると、アメリカはシアトルの東約200キロメートルに位置するモーゼスレイクの訓練所で DC-8 型機の実機訓練を受けます。ここの空港は以前軍用機訓練に使用されていたようで、滑走路の長さは4000メートルもあります。

ここでも宿泊は会社の借り上げ寮で原則として自炊でしたが、巡回する車に乗り町へ食事に出かけることも出来ました。実機で10数時間の訓練を受け、航空局の審査も無事パス、DC-8 型機の型式証明を取得しました。

ここまで航空大学に入学してから3年6か月ほどかかりました。帰国してから副操縦士としての乗務見習を経て、副操縦士としての初フライトは5月17日の大阪泊まりの国内線でした。この夜は1人ホテルのバーで自分に乾杯しました。

国内線を半年くらい乗務してから東南アジア路線、南回りヨーロッパ路線に移りました。副操縦士になりたてはほとんど自分で操縦することはありません。フライトプランへの記入などのペーパーワークは全て副操縦士が担当します。飛行中の無線通信も機長の同意と確認を得て副操縦士が担当します。着陸後は運航管理室に飛行記録を提出します。



ジャンボ機訓練の時、同僚と

南回りヨーロッパ線は日本から針路を西に取り、香港を経て、当時戦争中のベトナムの上空を通り、タイのバンコクで給油します。インドのニューデリー、イランのテヘラン、レバノンの首都ベイルートを経てローマに行きます。そのうちの何便かはボンベイ、パキスタンのカラチ、エジプトのカイロにも寄りました。

こうした中 1972 年の 6 月にインドのニューデリー空港で同期の副操縦士が乗務していた DC-8 型機が夜間の着陸に失敗して墜落しました。日本航空として初めてお客様を死なせる事故を起こしてしまいました。とても辛い出来事でした。インド人管制官の英語は巻き舌で聞きにくく、進入用管制レーダーもよく故障しました。現在の装備ならこの事故は防げたと思います。

1973 年の 8 月に、私と同期は B-747 ジャンボ機に機種移行の辞令を受けました。再度、羽田の訓練所でジャンボ機の座学が始まりました。座学の途中で羽田に駐機していたジャンボ機の操縦席にはじめて座ったときの第一印象は“こんな高い操縦席からの操縦は私には無理だ”です。なんと三階建ての屋上から見下ろす感覚です。

この時期、日本航空は会社が急速に発展していました。この座学中に年配の訓練教官の機長が、飛行機が着陸進入中に突然向かい風が減少したらどうなるかと質問しました。飛行機の“計器速度

が減って危険になる。”が正解ですが、私が間違えて答えたら“俺は、馬鹿は嫌いだ”と言って正解を示さず教官室に戻ってしまいました。

一台しか無かったジャンボ機のシミュレーターが何回か訓練した後、大きく故障してしまい、残りの訓練を急遽コロラド州デンバーにあるユナイテ

ッド航空のジャンボ機シミュレーターを借りて、ユナイテッド航空の教官により訓練を続けることになりました。

ユナイテッド航空では、ジャンボのような最新で大型機の操縦はセニョリティ（年功）順に移行し、飛行手当も大型機ほど高くなると言われています。私達のような 30 歳前のパイロットがジャンボ機を操縦するなどあり得ないのでしょうか？腕が良いのか、成績が優秀なのかとしつつ聞くので、全部にそうだと答えておきました。

実のところ会社は操縦士が足りないので、機種移行訓練費を出来るだけ抑えるため、若い私達の期をジャンボ機の副操縦士に選んだようです。また教官に嘘をついてしまいました。実機に乗るとジャンボの高い操縦席にもすぐ慣れました。実機訓練を 1973 年 12 月に無事終わりました。

当時まだ数少ないジャンボ機は、アメリカの西海岸、ホノルルとアンカレッジ経由の北回りヨーロッパ路線にだけ就航していました。長距離で比較的客户の多い路線です。こんな中 1974 年 8 月から 1976 年の 7 月まで私はアンカレッジの副操縦士駐在員に任命されました。アンカレッジから北回りヨーロッパ線にもつばら乗務することになりました。家族も一緒でした。

(続く)

波乱万丈の生涯 — 李香蘭 (1)

和田 宏

■李香蘭の妹と対面

『わんりい』の読者の皆さんなら、李香蘭（1920.2.12～2014.9.7 享年 94 歳）のことはよく知っておられるだろうから、私の勝手なエピソードを書かせていただこうと思う。2018 年 4 月、浅利慶太氏演出の劇団四季のミュージカル『李香蘭』を浜松町の自由劇場に見に行った際、ミュージカルの中休みに、たまたま私の後ろに座っていた綺麗な老女が中国語で話しているの、私は『你是中国人吗？（貴女は中国人か？）』と話しかけたら、『我是李香兰的妹妹。（私は李香蘭の妹です。）』と答えた。私は、『真的吗!？（本当か!？）』と驚いて飛び上がった。直ぐにツーショットを撮らせて戴いた。彼女は、『中国で生まれたから、中国語を話すのは簡単よ。』と答え、そのあと私に、『你猜猜我的岁？（貴方、私の年齢を当ててごらん？）』とおっしゃったので、私が、とっさに『八十五岁』と言ったら、ずばり当たった。10 歳くらい若く言ってあげたら良かったかなあ～。彼女は、李香蘭の妹・山崎（旧姓：山口）誠子さん（東京都在住）であったのだ！



李香蘭 (ウィキペディアから)

李香蘭は、浅利氏との対談の中で、『1991 年 1 月の初演以来、しばしばこのミュージカルを見に来ました。その度毎に戦争の残酷さと自身の弱さ、醜さ、至らなさを嘔み締めていました。孫平化さんからは日中の懸け橋になって下さい。いつでも故郷は貴女を歓迎しますよと言われた。』と話し、これに対して浅利氏は、『李香蘭が漢奸として捉えられ軍事裁判

にかけられながら帰国できたのは、蒋介石が、“以德報怨”という東洋の教えを重んじたからで、その“以德報怨”をミュージカルの最後に裁判長に言わせた。』と語っている。

■生い立ちと中国語の習い始め

山口淑子は 1920 年 2 月 12 日、当時の中華民国奉天省の炭鉱の町、奉天北煙台で、佐賀県出身の満鉄社員の父・山口文雄と福岡県出身の母・アイの 6 人姉弟の長女として生まれた。生後間もなく撫順市に転居。4 歳の頃から淑子に中国語の基礎を教えたのは父であるが、撫順女学校に通った 13 歳の淑子が、父の友人、李際春の第二夫人の家に同居した際、纏足をしていたこの女性からも北京語を教えてもらった。そのお陰で淑子は中国語の国家検定 2 等に合格した。

■名前の由来と歌手デビュー

満州国建国の 1932 年、奉天市に引っ越しし、12 歳になった淑子は、肺浸潤にかかったあと、その回復に良いからと親友のリュバに勧められて、ロシア人と結婚していたイタリア人ソプラノ歌手、マダム・ポドレソフから声楽を習う。またこの頃に、父が親しく付き合っていた山東省の軍閥で、当時は瀋陽銀行総裁だった李際春の乾姑娘（名目上の娘）として李の姓を貰い、名を父の俳号の香蘭とした。李



左は筆者（72）李香蘭の妹・山崎誠子さん（85）。2018 年 4 月 10 日、自由劇場で（括弧内年齢は当時）

際春は回族でイスラム教徒である。翌 1933 年、奉天ヤマトホテルで開かれたポドレソフのリサイタルの前座に、着物姿の李香蘭がシューベルトのセレナーデなど 4 曲歌ったところ、奉天放送局の目にとまり、スカウトされた。『満州新歌曲』という番組で放送する際、芸名をどうするかという話になり、淑子の方から李香蘭の名前を提案し、局側もこれに応じ、放送ではあえて経歴の説明を省いて“歌は李香蘭”とだけ告げ、ラジオ放送された。李香蘭 13 歳の歌手誕生である。

■女優デビュー

1934 年、両親と共に北京に移住し、父の友人の潘毓桂の乾姑娘となって、14 歳で北京のミッションスクール翊教女学校に通った。この時使用した名前は潘淑華。盧溝橋事件翌年の 1938 年 9 月、翊教女学校を卒業した 18 歳の彼女は、今度は、満州映画協会にスカウトされた。歌の吹き替えだけと言われて列車に乗せられ、連れて行かれたところが新京（長春）

の満映撮影所だった。フィルムが回り、李香蘭は意に染まないまま演技させられ、『蜜月快車』という映画の主役となった。李香蘭 18 歳の女優デビューである。映画の中で、中国人男優・杜寒星に平手打ちをしている。1940 年公開の映画『支那の夜』では、逆に李香蘭が長谷川一夫から平手打ちを受け、一転して従順になるシーンがあり、これが中国人の反感を買ひ、後年の漢奸裁判の焦点となった。1938 年 10 月、李香蘭は人気が出て、中国から“日満親善女優使節”として初来日。18 歳の彼女にとっては初めて“祖国”日本の地を踏んだ。中国服を着ていた李香蘭は、下関の入国係官からパスポートを確認され、“山口淑子芸名・李香蘭”とあるのを見つけた係官が、『一等国民の日本人が三等国の中国の服なんか着て、恥かしくないのか。それでも日本人か。日本帝国臣民なら日本語を覚え！』と怒鳴られた。彼女は生まれ育った“母国”中国を日



「迎春花」の DVD

本人は蔑んでいたことに気づかされ、胸がえぐられた。実は、私がコンビニ店で働いている中国人留学生に中国語で話しかけ、中国人からは“那么、你的故乡在哪儿？（ならばお前の故郷はどこか？）”と聞かれて、私を中国人と勘違いしているなど、ほくそ笑んだり、逆に電車の中で中国語で喋っていたら、日本人の若いチンピラから、『中国人め、うるさいな！ 帰れー！』と怒鳴られたことがある。李香蘭の体験を私も 80 年後に少し味わった訳である。

1939 年、24 歳の森繁久弥は NHK アナウンサーとして採用され、新京放送局に勤務したこともあるが、李香蘭とは出会っていない。1941 年の紀元節 2 月 11 日、李香蘭が有楽町の日劇でリサイタルを開いた時は、押し掛けた群衆がビルの周囲を七回り半取り巻く大騒動となる。

1942 年 7 月発売の『花白蘭の歌』という歌は、歌詞が♪薫りも高き白蘭の花の姿の清らけき心の人となれかしと母の願いの蘭花扇・・・と、李香蘭と楠

木繁夫が歌っているのだが、元歌は、エルネスト・デ・クルティスが作曲した『忘れな草 Non Ti Scordar Di Me』である。1935 年イタリア映画『忘れな草』の主題歌として使用され、名テノールのベニヤミーノ・ジーリが映画の中で歌ってヒットした。ところが、コロムビアレコード盤には、作曲：古賀政男、作詞：白井鐵造となっており、戦前は著作権などと言う概念が無かったからだろうか。クルティスは、『帰れソレントへ』の作曲者でもある。

■姑娘画

梅原龍三郎画伯が 1940 年頃、北京で李香蘭の肖像画を描いた際、『動かないで』と言い、『君の右の眼と左の眼は違っている。右の眼は自由奔放に突っ走っていて、左の眼は静かで恥かしそうな表情をしている』と言ったそうである。李香蘭は、目が大きくて金魚の“出目金”というあだ名もあった。

■コロラトゥーラ・ソプラノ

李香蘭が出演した映画は数多くあるが、終戦直前に北京と上海で数回だけ公開上映された『私の鶯』という幻の映画がある。通常の作品の5本分の費用と1年4か月の期間を掛けて作られた本格的音楽映画。ロシア革命から満州事変・満州国成立にかけてのハルビンの白系ロシア人社会やハルビン歌劇団が舞台となっており、ロシア語・中国語・日本語の会話が飛び交う。その中でロシア人バリトン歌手の養女役の李香蘭が歌う“私の鶯・モイサラベ”は一聞に値する。見事なコロラトゥーラ・ソプラノの喉を、ロシア語と日本語で披露している。コロラトゥーラとは、歌曲の中で速くて装飾が華麗に付いている部分をいい、ソプラノ歌手のうち、高い声をコロコロと転がすように歌える歌手を特にコロラトゥーラ・ソプラノと言う。佐藤しのぶや森麻季ほどの声量は無いものの、彼女の澄んだ歌声こそが永垂不朽（永遠に不滅）のレガシーであると私は確信する。李香蘭は、中国、東南アジアなどの各地で皇軍の慰問やリサイタルをしたが、その際、威儀を正して必ず最初に歌った歌は“荒城の月”だった。

■サヨンの鐘

李香蘭は、台湾が舞台の映画『サヨンの鐘』にも出ている。彼女が23歳の時、台湾の先住民・高砂族の17歳の娘サヨン（莎韻）役を演じている。赤紙が来て出征する日本人の先生をサヨンが見送った帰路、雨で濡れていた丸木橋で足を滑らせ川に落ちて

亡くなるという1938年にあった実話をもとに、1943年7月封切された松竹映画である。サヨンの鐘と慰霊碑が台湾の宜蘭県南澳郷の事故現場に建てられた。

■命の恩人

山口淑子は、1931年、11歳の小学6年生の遠足の列車の中で、同い年のリュバ・モノソファ・グリーネツに初めて出会って直ぐに意気投合し、生涯の友となった。リュバの親は、ユダヤ系亡命白系ロシア人で、菓子店を営んでいた。リュバは15年後の1946年、李香蘭が“漢奸”として上海で裁判に掛けられ、処刑されるのを救った命の恩人である。戦勝国ソ連のリュバは丁度、上海のソ連総領事館に勤務しており、李香蘭の戸籍謄本を両親の居る北京と上海の間をとんぼ返りして取って来てくれた。日本人形の藤娘の帯の中に縫い込められて隠されていた。両親は日本人であることが判明し、『侵略して来た日本人が中国人を騙すのは当たり前だ。』という論理で無罪放免、国外退去となった。帰国の乗船直前、出入国管理官に李香蘭と見破られ、再度収容所に連れ戻されたが誤解は解けて、10日後に出国できた。李香蘭が1946年3月末、引揚げ船「雲仙丸」で黄浦江沿いにある上海港を離れた際、船上のラジオから流れて来たのは、何と！李香蘭の歌う“夜来香”だった。親日派軍閥の李際春は漢奸として中華人民共和国の成立後に処刑された。もう一人の名目上の義

理の父親となった潘毓桂は漢奸として捕まったが、国民党政府高官の経歴などがあった為、処刑は免れた。リュバとは、NHK番組『李香蘭遥かなる旅路』のディレクターがリュバの住居を探し当ててくれて、1946年上海で別れて以来53年ぶりに、1998年にロシア連邦エカテンリンブルクで、共に78歳になった二人は再会を果たした。リュバは翌1999年逝去。

(続く)



「サヨンの鐘」日本李登輝友の会より



映画『サヨンの鐘』で高砂族の身なりをした李香蘭
(ウィキペディアから)

ラオスに、子どもたちとお話をつなぐ「ストーリーキャラバン」を！

ラオス 山の子ども文庫基金 安井 清子

夢広場・まちカフェ……何か行事があると、‘わんりい’のブースには、彩も美しい刺繍を施した小物が並びます。これらの品物は、長年ラオスで山岳民族モン族の子どもたちの為に図書館活動をしておられる安井清子さんからお預かりしたもので、売り上げは、ささやかながら安井さんの活動資金に組み入れられます。現在もラオスでご活躍中の安井さんから手記転載の許可を得ましたので、ご紹介します。

安井さんの素晴らしい活動に対し、広く皆さまのご理解とご協力が得られますように!!

こんにちは、安井清子です。

私はラオスで長い間、子どものための図書館の活動に携わっています。15年前に日本の方々の支援で出来た任意団体「ラオス山の子ども文庫基金」は、いまもビエンチャン市内とモン族の村にある3つの小さな図書館を継続支援しています。2016年には、READYFORを通じて、「ラオスの小さな村の図書館を、世界の絵本と出会える素敵な場に！」にご支援を頂き、ラオス語訳を張り付けた世界の絵本の補充と図書室の整備、そしてモン族の民話の絵本を2冊出版することができ、国立図書館を通し子どもたちに配布することも出来ました。

私たちは、3つの図書館を、「子どもたちが来て、本とお話を楽しむ場所にしたい！」とスタッフの人員費や、図書の補充などの支援を続けています。スタッフには、「子どもたちにお話を読んであげること！」の大切さを伝えて来ました。最近では、高校生になった子どもたちが、小さな子どもたちにお話を読んであげたり、字を教えてあげたり……という姿も見られるようになっていきます。

でも、一般的には、ラオスの子どもたちが本を読める環境は、まだまだ少ないのです。出版物も少なければ図書室も少ない……またそれ以上に、様々な団体の支援で図書室ができて本が入って

も、大人がお話の楽しさを子どもたちに伝えてあげられない、という現状があります。それは、小学校の先生を含め、大人も本を読んで楽しんだことがあまりないからです。

「ラオスの山の子ども文庫基金」は日本の方々の支援により、3つの子ども図書館を運営してきました。

そして2年ほど前から、ラオスの役所の認可を受けてできたラオスの財団「あらいふさきち教育奨励財団」も、ラオスの子ども図書館活動に支援

をすることになりました。ラオスの財団なのに、日本人の名前が付いているのはなぜかと言うと、新井房吉(故人)という方の遺志を継いだ養女の磯部久美子さんの資金を元に、ラオスで作られた財団だからです。あれこれの経緯があって、其の財団を、ラ

オスの仲間たちとともに引き継ぐことになったのです。資金規模は小さい財団ですが、子どもたちの心を育て、本と子どもたちをつなぐ活動を主にやっつけていこうと活動を始めています。

当財団では、これまでに、なるべく本が届かない地方に本を届けようと、ビエンチャンから遠く離れた場所の学校2か所に図書を寄贈、そして、この夏はビエンチャン市のはずれの、やはり図書が無い村の小学校に、小さな図書室を作りました。でもやはり、図書室を作って本を入れるだけでは



ダメなのです。ラオスでは、文字を読むことが不得意な人も多く、これまでは本もあまりありませんでした。だから、先生自身も本を読んだことのない人たちが多く、放っておけば、図書室はあまり開かれずじまいになってしまうことが往々にしてあるのです。子どもたちも最初からスラスラ読めるわけではありません、子どもと本をつないで、お話を楽しく伝える大人があまりいないので、折角の本があっても十分に生かされずに、破れて放置されて終わってしまったりします。

■ラオスに、「ストーリーキャラバン」を作ろう

今、私たちがやるべきことは、これまで私たちが関わって作ったところや、また、まだ図書室などが無い他の場所の子どもたちも含め、もっと広く、もっと多くの子どもたちを繰り返し訪ねて、本の読み聞かせとともに、人形劇やストーリーテリングといった活動を実践していくことによって、子どもたちが本とお話に楽しく接する時間を作り、子どもたちの心をお話とつないでいく……そんな活動を活発にしていく必要があるのだと感じています。

私が大学卒業後、最初に働いたのは「おはなしきやらばん」という教育財団でした。(現在はもう解散して、ありません。)日本で、子どもたちのところを訪ね、お話をして巡る活動でした。最初は絵本の読み聞かせから始まったのですが、私が入った頃には人形劇の舞台を持って、幼稚園、小学校などを巡り、人形劇を通してお話をしていました。私はその舞台を始めて見た時、子どもたちが夢中になって劇に見入り、お話の世界に入り込んでいる姿に感動し、私もやりたい!と、「おはなしきやらばん」に入ったのでした。それがきっかけとなり、タイやラオスでの「子どもの図書館」を作る仕事に関わることになりました。

ラオスの図書館でも、絵本の読み聞かせ、人形劇も取り入れてはいますが、やはり、もっと本格的に取り組んで、もっと広く、もっと大勢の子どもたちに、お話の楽しさを伝えたい……いつか、ラオスで「おはなしきやらばん」をやりたい!と

ずっと思っていたいました。

ちょうど財団のラオス人メンバーは演技者、制作者でもあり、これまでも一緒に人形劇を作ったりしています。一人は語り手だったおじいさんにお話を聞いて育ったという人です。私自身も含め、「ストーリーキャラバン」のメンバーが揃っている今、お話、本の楽しさを伝える「ラオス・ストーリーキャラバン」を結成して、子どもたちを訪ね、お話を伝える活動を、ラオスで実現させたい!今、始動する時がきているのだと思っているのです。

■もっと楽しく、もっと大勢の子どもたちに、お話を伝えたい!

まずは、私たちが関わってできた図書館、図書室を始め、ビエンチャンの手近な小学校を数カ所選んで、定期的に新しい演目を持って子どもたちを訪ね、子どもたちの心にお話の世界を広げる楽しさを!自分で本を読む楽しさを!そして、想像を膨らませ、表現することの楽しさを!届けていきたいと思っています。

このような活動は、未だ、ラオスではほとんど行われていません。私たちも未熟ではありますが、初めの一步を踏み出したい。そして、子どもたちだけでなく、教育に関わる先生たちをはじめ、大人たちにもぜひ参加してもらい、読書推進活動の一環として、お話を伝える活動の経験を積んでいきたいと思います。

将来的には、ラオス国内で資金調達ができるようになりたいものですが、まだまだ難しいのが現状です。まずは、「ラオス・ストーリーキャラバン」の活動を立ち上げ、多くの子どもたちの心にお話をたくさん届ける活動を始動させること!そのための資金を皆様にご支援いただければ、幸いです。

どうぞ宜しくお願い致します。

注) モン族: ラオスの山岳地帯に住むモン(Hmong)族は、その昔中国の洞庭湖付近から南下して、ラオス、ベトナムなどの山岳地帯に住むようになったミャオ(苗)族の支族。(ウィキペディアなどから)

東京の町ウォーク・早稲田、神田川界隈

‘わんりい’ 会員の浪花氏から「年に 2 回くらい、街歩きや軽ハイキングをして‘わんりい’メンバー同士の交流は如何？」の呼び掛けで、1 回目は 4 月初めに向島界隈を歩き、11 月 2 日(土)、その 2 回目を実施した。

今回は、東京は新宿区と文京区に跨る辺りで、山手線高田馬場早稲田口から出発した。

コースは、玄国寺(新宿区)→甘泉園公園(新宿区)→神田川→肥後細川庭園(文京区)→永青文庫(文京区)→東京カテドラル聖マリア大聖堂(文京区)→関口芭蕉庵(文京区)→早稲田大学演劇博物館(新宿区)→穴八幡神社(新宿区)。(地図参照)

これまでに個人で訪れた地点もあるが上記の地点を繋いで巡り歩くことはなかった。山歩きでもなければ地形図を見ることはないのでは気が付かなかったが、東京 23 区のだ真ん中ともいえるこの界隈、結構きついアップダウンがある地形でびっくりした。それともう一つ、「いいなあ！」と感動したのは、甘泉園公園と肥後細川庭園。共に湧水を漫々と湛えた池を巡って回遊でき、広さ 1 ヘクタールをはるかに超える手入れの行き届いた緑濃い庭園で四季折々の自然の移ろいも鑑賞できる。緑陰でゆっくり休憩ができる心遣いもある。しかもなんと、両方とも無料なのだ。住宅地の中だから近所の人は本を持って木漏れ日の中でひととき読書を楽しむことができるのでは。

昼食は目白通りに面したイタリアンレストラン「タベルナ アイ」でコースランチを食べた。屋外にもテーブルとイスがあり、店そのものは小さいが、土日は車が少ないからか、大きく開いた窓から初秋の風が室内に流れる。開放的な雰囲気はヨーロッパだ。店名に「タベルナ」とあるが、リーズナブルな料金で味も良かった。



「50 歳からの東京ウォーキング (交通新聞社)」から

丹下健三氏設計の東京カテドラル聖マリア大聖堂で荘厳な雰囲気味わった後はもう一度きつい坂道を下って神田川脇にある芭蕉庵に立ち寄り、そのまますぐ早稲田大学構内へ。折から秋の学園祭の真最中で、大学キャンパスに溢れかえった若者たちのエネルギーと熱気に当てられてもみくちゃにされながらやっと演劇博物館に辿りついた。「追悼 映画女優 京マチ子展」を開催中で、京マチ子主演の映画が上映されていた。

今回の「街ウォーキング」の最後は、早稲田大学に近い「穴八幡宮」。江戸時代、南側山裾の横穴から金銅の阿弥陀如来像が発見され「穴八幡宮」と呼ばれるようになったとか。江戸時代から、金繰りがよくなると伝えられる「一陽来復」のお守りが冬至から節分の間だけ売られ、冬至の日が休日に当たると境内は大賑わいになるそうだ。

今回訪ねた各ポイントの名をキーワードに是非ネット検索してみたい。写真も沢山掲載されている。大都会の中の、古き良き時代の残り香を味わい、且つ、東京ならではの文明の最前線も楽しんだ街歩きだったと知ってもらえると思う。次回は 4 月又は 5 月にとのこと、ご一緒に如何でしょうか。(報告：田井光枝)

“わんりい”の催し 2019年度 第12回市民協働フェスティバル「まちカフェ」

2019年12月1日（日）10:00～16:00 場所：町田市役所全館

第13回市民協働フェスティバルの「まちカフェ」が、昨年12月1日に町田市役所の1階から3階のフロア一っばいに開かれました。テーマは「愛着と誇りを受け継ぐまちだ」です。参加は町田市内で活動するNPO団体、市民サークル、町内会などの81の団体で、それぞれの活動状況の発表や手作りの工芸品、新鮮な地場野菜の販売などを通じて交流を図りました。

フェスティバルは、午前10時に石阪市長の開会宣言でスタート。わんりいは、5度目の参加で例年通りラオスの少数民族・モン族の刺繍小物の販売に加え、今回が初めてとなる会員の佐藤紀子さん製作の宮沢賢治をイメージしたトートバッグの販売もしました。昨年は1階の人通りの多いブースでしたが今回は3階のブースとなり、昨年ほどの売り上げにはなりませんでしたがそれでも多くの方々の目に留まりお買い上げいただきました。これらの収益はモン族支援の「安井さん」と雲南の少数民族の支援をされている「日本雲南聯宜協会」に寄付をすることになっています。

また、今回も満さんの水墨画教室を午前・午後に分けて行いました。3階ということで参加者が果たしてどのくらいあるか心配しましたが、始めると次々と大人から子供までの参加があり来年の干支のくねずみ>を満さんの指導により、一生懸命に取り組んでいました。

まちカフェは午後4時にお開きとなりましたが、市役所の担当部門である市民協働推進課によりますと過去最高の9100名の方がご来場いただいたと発表がありました。（報告：寺西俊英）



町田市役所全景（ウィキペディアより）



Wish You All the Best in 2020

'わんりい'の皆様

East Face of the main-peak 6250m

Kenzo Okawa

Four Girls Mountains N.R. & Queen Valley in the Trans-Himalayas

四川省「四姑娘山」山麓にお住まいの写真家・大川健三さんから「わんりい」の皆様宛に年賀状を頂きました。今年もすばらしい写真を期待できそうです。

~~~~ 1月の講座案内~~~~

- ☆ 中国語で読む漢詩の会
 - ・講師：植田渥雄先生 桜美林大学名誉教授
 - ・場所：まちだ中央公民館 視聴覚室
 - ・日時：1月19日(日) 10:00~11:30
2月23日(祝) 同上
 - ・会費：1,500円(講師謝礼・会場使用料等)
 - ・申込：寺西 ☎090-1425-0472
- ☆ ボイス・トレーニング
 - ・講師：Emme/エメ (歌手)
 - ・場所：まちだ中央公民館 プレイルーム
 - ・日時：1月21日(火) 10:00~11:30
2月18日(火) 同上
 - ・会費：1,500円(講師謝礼・会場使用料等)
 - ・申込：鈴木 ☎042-735-7187

崔宗宝とイタリアカンツオーネ&アリア

- ★第9回海老名ニューイヤーコンサート
 - ・2020年1月18日・海老名市文化会館
- ★第5回大和ニューイヤーコンサート
 - ・2020年1月19日・やまと芸術文化ホール
- ▲両会場共 14:00 開演 ▲全席指定
- ▲S席 3,500・A席 3,000/当日：500円増し
- 申込：海老名 ☎046-232-3231
大和 ☎046-259-7591

曹雪晶 二胡アフタヌーン・コンサート

- ・ルーテル市ヶ谷ホール
- ・2020年3月4日(水)
14:00 開演 (13:30 会場)
- ・全席自由席 4,000円(税込)
- ・申込：オフィス・和弦
- ・☎090-8775-7981 FAX 03-6912-7607
- E-mail: 25wagen@gmail.com

◆‘わんりい’の催し◆

2020年‘わんりい’の新年会

2020年2月2日、‘わんりい’恒例の、“シュワ
ンヤンロウ”（羊肉のしゃぶしゃぶ鍋）を囲む新年
会を開催致します。年に一度の楽しい一時を、是
非ご一緒したいと思います。

詳細は下記をご覧ください。

◆ 記 ◆

- 日時：2020年2月2日（日）11:00～15:00
- 場所：麻生市民館 料理室
小田急線新百合ヶ丘駅下車 徒歩3分
- 会費：1,500円
- 定員：40名
- 申込：☎ 090-1425-0472

E-mail：t_taizan@yahoo.co.jp

（わんりい会員・会友のみご参加頂けます）

2020年の春節は1月25日です。2月2日は、節
分の前日、立春を前にして、‘わんりい’の新年会
にはうってつけの日になりました。

新年会は、毎年楽しみにしてくださる方が多く、
時には、せっかくお申し込み頂いても、お断りし
なくてはならないこともあります。参加を希望さ
れる方はお早めにお申し込みください。

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1500円入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい
途中入会の方には会費の割引があります。
下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから
付けられました。「文化は万里につながる」
の想いから名付けました。主としてアジア各
国から来日の方々と協力して文化交流活動を
続け、国や民族を超えた友好を深めて来てい
ます。会員になりますと、

- ①年10回、会報誌‘わんりい’を送付
- ②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

◆ ‘わんりい’ ホームページは、都合により
暫くお休み致します。ネットでお楽しみ頂
いていた方には申し訳ありません。ご入会
いただければ、会誌を郵送させていただきます。

◆ 町田国際交流センター（町田市民フォー
ラム 4F）、町田生涯学習センター（109 ビル
6F）、中国文化センター、川崎市国際交流セ
ンター、神奈川県立地球市民かながわプラ
ザ・他でご自由に取って頂けます。上記へ
お問い合わせください。

【‘わんりい’の原稿を募集しています】

‘わんりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会
の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さ
んの原稿で作られています。海外旅行などで体験さ
れた楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で
見聞した面白い話、これはと思う楽しいイベント情
報などを気軽にお寄せ下さい。

▼1月の定例会

1月10日（金）13：30～
三輪センター第三会議室

▼ ‘わんりい’ 2月号は休刊します。

3月号発送は2月29日（土）10：30～
三輪センター第二・第三会議室（弁当持参）

‘わんりい’ 250号の主な目次

寺子屋・四字成語(29) 一飯千金	2
「遼陽」という街 (5)	3
「漢詩の会」(36) 李白の「峨眉山月の歌」と 岑参の「行軍九日長安の故園を思う」	5
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑨）	8
退職ジャンボ機長の回想③	10
波乱万丈の生涯/李香蘭（1）	12
ラオスに、子どもたちとお話をつなぐ 「ストーリーキャラバン」を！	15
‘わんりい’ 活動報告 東京の町ウォーク・早稲田、神田川界限	17
2019「まちカフェ」	18
大川健三さんからの年賀状	19
‘わんりい’の催し・他	20